

令和 5 年 6 月 14 日現在

機関番号：32689

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2022

課題番号：17K18078

研究課題名(和文) ハワイ語ラジオ番組を事例とする危機言語の復活とメディア利用に関する会話分析的研究

研究課題名(英文) The revitalization of endangered languages and their use in media: A conversation analytical study of a Hawaiian language radio program

研究代表者

古川 敏明 (Furukawa, Toshiaki)

早稲田大学・社会科学総合学院・教授

研究者番号：90609372

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は消滅の危機に瀕した言語の再活性化運動を相互行為的観点から検証することを目的とし、1970年代に開始したハワイ語ラジオ番組カ・レオ・ハワイ(KLH)をデータとして分析を進めた。KLHには第一期と第二期があり、1時間の番組が各400回程度放送され、デジタル化された番組は、先住民コミュニティにおいて貴重な文化・教育資源として利用されている。しかし、リソースとして重視されているのは第一期の録音であることが多く、第二期は相対的に軽視されてきた。そこで、本研究は特に1990年代に放送された、第二言語としてハワイ語を使用する出演者が大多数となった第二期を対象として、文字起こしと分析を進めた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、(1)危機言語を相互好意的観点から分析したこと、(2)ハワイ語再活性化の重要なリソースとなっているラジオ番組KLHの第二期に注目したことの2点である。社会的意義としては、(1)研究の過程で文字起こしの協力を仰いだ協力者を通じて、ハワイ語コミュニティと人的ネットワークを構築したこと、また、(2)文字起こし資料をハワイ語コミュニティに提供し、データベースの構築に貢献したことの2点を挙げることができる。

研究成果の概要(英文)：This study adopts an interactional approach to language revitalization, focusing on Ka Leo Hawai'i (KLH), a Hawaiian language radio program established in the 1970s. KLH consists of two periods: the first period (1970-80s) and the second period (1990s). During each period, around 400 one-hour shows were produced, most of which have been digitized and serve as valuable cultural and educational resources for the Hawaiian language revitalization movement. However, the second period has received relatively less attention, partly due to the limited availability of elders who could participate as guests on the program. The present study aims to shed more light on the second period of KLH by conducting an analysis of interaction in L2 Hawaiian.

研究分野：言語学

キーワード：ハワイ語

### 1. 研究開始当初の背景

言語学の関心は単語や文という単位に向けられてきた。文よりも大きな単位としての談話や特定の文脈に根ざす言語使用としての談話は、必ずしも言語学の中心的な研究課題とはされてこなかった。こうした傾向は危機言語の記述研究においても同様である。たとえば、危機言語の代表例としてのハワイ語の記述研究では、母語話者とのインタビューを収録した映像や録音が生み出されてきたが、こうした映像や録音は伝統文化に関する知識を抽出する資料とされ、談話レベルの分析は重視されてこなかった。インタビューのやりとりが文字化されることがあったとしても、多くの場合、相互行為としての本質が消されたモノログ形式で文字化が行われた。

ハワイ語の復活運動に新たな研究成果や学習教材を提供するためにはハワイ語の会話データを相互行為として表記し、分析する必要が高まっている。また、ハワイ語にかぎらず、言語の復活を成し遂げるためには伝統的な言語使用場面や日常生活場面とは異なる、マスメディアのような新しい、非伝統的な場面における言語使用を調査する必要があるという指摘がされている。

### 2. 研究の目的

KLH の第一期と第二期に見られる言語実践を比較する上で、まずは第二期のデータ構築を優先的に進め、先行するプロジェクトで構築した第一期のデータである放送 28 回分 (30 時間分) と同程度の量のデータ構築を目指す。

毎年度追加されるデータに基づいて分析を行い、特に母語話者同士の会話と、第二言語話者同士の会話の特徴を、(1)相互行為の連鎖構造と(2)カテゴリー使用を通じたアイデンティティ構築という 2 点から明らかにする。

上記の通り、番組の音声データは膨大な量になるので、全データに適用される確率論的な一般性を探求するのではなく、会話分析の分野が扱う規範的な一般性を特定の文脈で展開される会話の抜粋を詳細に分析することで描き出したい。

### 3. 研究の方法

(1)ハワイ語ラジオ番組 KLH 第二期の録音データをハワイ大学の機関リポジトリより入手し、全放送回の情報を集約したカタログを作成する。

(2)KLH の第一期及び第二期の録音データの文字起こしを行う。

(3)文字起こししたデータの分析を行い、会話分析用の詳細な記号化を行う。また、類似例の抜粋、コレクションの構築、一般化を行う。

(4)現地調査中に研究協力者と打ち合わせを行い、研究の進捗状況を把握する。

### 4. 研究成果

(1)KLH の第一期については全放送回の情報を集約したカタログがあるので、ハワイ大学図書館でコピーを作成し、これを参考にして、第二期についても全放送回の情報を集約することを目指して簡易版ながら参照しやすいためカタログの作成に取り掛かった。その結果、第二期の最初の音声ファイルである HV24.418 (1991 年 2 月 3 日放送) から HV24.800 (2000 年 1 月 16 日放送) までの大半の音声ファイルが存在することがわかった一方で、1997 年から 1998 年にかけて 15 個のファイルがハワイ大学の機関リポジトリから欠落していることを把握した。今後の課題としては、欠落しているファイルが図書館やアーカイブスに保管されているか確認し、もし保管されているものがあれば、それらを視聴するとともに今回作成したカタログに盛り込みたい。

(2)第二期の音声ファイルで文字起こしを完了したものが合計 20 回分 (約 20 時間分) に達した。第一期のデータである放送 28 回分 (30 時間分) と同程度の量のデータ構築を目指すという目的を一定程度達成することができた。今後の課題としては、データの幅を広げるために、対象とする年配者のゲストを増やし、文字起こしを継続し、データベースの拡充に努めたい。また、参加者が第二言語話者であるという意味において、第二期の放送と共通点が認められるウェビナーなどオンライン動画へとデータ収集の対象を広げる必要があるだろう。

(3)構築したデータベースに基づき、注目すべき箇所については会話分析用の詳細な文字化を施し、さらなる分析を行った。その成果は国際誌を含む複数の媒体に論文として発表した。キーワードは、「母語話者」、「第二言語としてのハワイ語」、「年配者」、「言語の切り替え」、「マルチリンガル性」である。

まず、「第二言語としてのハワイ語使用に関する会話研究」(2019a)は、第二期の放送回における重要なトピックとして浮かび上がってきた母語話者観について考察するため、マーナレオ(母語話者)と年配者(クプナ)の2つのカテゴリーの使用場面に着目して分析を行った。番組参加者たちがこれらを並置したり、ひとつのカテゴリーとして結合したりすることによって、番組スタッフやリスナーの多くを内包する第二言語話者や知識を継承する途上にある学習者というカテゴリーと対比的な位置付けをしていることを明らかにした。

また、2020年には一般の聴衆も参加したシンポジウムで「ハワイの声：メディアと先住民語の再活性化」と題した発表を行い、その内容が冊子として刊行(2020a)された。ここでも第二期からのデータに基づき、L2話者が物語る行為に着目し、ハワイ語やハワイの英語と目されるピジンを巡る歴史的背景も踏まえて、ハワイで生まれ育った人たちがどのように話すかを再構築するプロセスを詳述した。物語の報告はもちろん、どのような事柄であれハワイ語で表現可能なのだということも番組を通じて発信されているメッセージであることを指摘した。

Place and membership categorization in a Hawaiian language radio show (2019b)は本プロジェクト前から取り組み始めていた論考であり、第一期のホストとゲスト、さらには電話をかけてくるリスナーも交えた参加者間の相互行為における成員カテゴリー化と言語の切り替えの連関を分析した。この論考では主に年配のゲスト同士の会話に着目しており、第二期のL2話者同士のやりとりとの良い比較対象を提示することができたと言える。

同様に、第一期と第二期のデータの両方を盛り込んで執筆したのが A discourse analytic approach to practices of Hawaiian language revitalization in the mass media: Style, bivalency, and metapragmatic commentary (2020b)である。両放送期間からのデータを用いて、1970年代から1990年代までのデータに共通に見られる言語の切り替えとスタイルの特徴について論じた。言語の境界は必ずしも明確ではなく、時にはハワイ語と英語とピジンの境界が混ざり合う点にこそ、ハワイ語ラジオ番組参加者たちのマルチリンガル性が最も特徴的に現れている様を示すことができた。

(4)現地調査は2017, 2018, 2019年に実施することができたが、その後は研究期間延長・再延長を経た最終年の2022年に実施し、研究協力者と打ち合わせをした。コロナ禍においてはZoomを利用することもあった。

また、上述の文字起こし資料はテキストファイルとして、言語再活性化に取り組むハワイ大学ヒロ校の研究者・実践者グループと共有しており、今後、適切な時期が来れば、ヒロ校の研究者とその補助者たちによって、音声ファイルとセットで一般に公開されていくことが見込まれる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 古川敏明	4. 巻 -
2. 論文標題 言語再活性化運動とニューノーマルの実践: コロナ禍のハワイ語ウェビナー 'Ai Kōleを事例として	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 大阪大学言語文化共同研究プロジェクト2022 応用会話分析研究: ニューノーマルの達成・獲得を可視化する	6. 最初と最後の頁 14-23
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 古川敏明	4. 巻 2018
2. 論文標題 第二言語としてのハワイ語使用に関する会話研究: 母語話者カテゴリーManaleo をめぐるやりとり	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 大阪大学大学院言語文化研究科 応用会話分析研究: 制度的会話におけるカテゴリー化と連鎖構造	6. 最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.18910/72758	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Furukawa, Toshiaki	4. 巻 印刷中
2. 論文標題 Place and membership categorization in a Hawaiian language radio show	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Pragmatics & Society	6. 最初と最後の頁 印刷中
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1075/ps.18011.fur	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件（うち招待講演 4件/うち国際学会 4件）

1. 発表者名 古川敏明
2. 発表標題 第二言語としてのハワイ語とパート・ハワイアン
3. 学会等名 ひと・ことばフォーラム (招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 古川敏明
2. 発表標題 「本当」のコードスイッチングとは？
3. 学会等名 大阪大学マルチリンガル教育センターFD研修（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Toshiaki Furukawa
2. 発表標題 Represented talk on radio: How is a narrative told successfully in L2 Hawaiian
3. 学会等名 CAN-Asia 3rd Symposium on L2 Interaction (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 古川敏明
2. 発表標題 ハワイの声：メディアと先住民語の再活性化
3. 学会等名 愛知大学人文社会学研究所シンポジウム：『ことばの詩、生活の詩、社会の詩 日常の中のポエティックス』（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Toshiaki Furukawa
2. 発表標題 The poetics of Hawaiian media talk: Performing L2 user identity in a Hawaiian language radio program
3. 学会等名 16th IPrA (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Toshiaki Furukawa
2. 発表標題 Pidgin and Hawaiian: Exploring semiotic resources in a Hawaiian language radio program
3. 学会等名 Sociolinguistic Workshop: Language Contact and Language Variation: The Case of Hawai ' i (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 古川敏明
2. 発表標題 The construction of L2 user identity in a Hawaiian language radio program
3. 学会等名 2nd CAN-Asia Conference (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 古川敏明
2. 発表標題 マスメディアと言語再活性化：ハワイ語ラジオ番組における第2言語使用者の役割
3. 学会等名 第35回日本オセアニア学会研究大会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計6件

1. 著者名 片岡 邦好、武黒 麻紀子、榎本 剛士	4. 発行年 2022年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 312
3. 書名 ポエティクスの新展開	

1. 著者名 古川敏明・土肥麻衣子	4. 発行年 2021年
2. 出版社 白水社	5. 総ページ数 155
3. 書名 ハワイ語で話そう	

1. 著者名 三宅 和子、新井 保裕	4. 発行年 2021年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 284
3. 書名 モビリティとことばをめぐる挑戦	

1. 著者名 松村圭一郎 他24名	4. 発行年 2020年
2. 出版社 河出書房新社	5. 総ページ数 224
3. 書名 わたしの外国語漂流記：未知なる言葉と格闘した25人の物語	

1. 著者名 Toru Okamura and Masumi Kai (Eds.)	4. 発行年 2020年
2. 出版社 IGI Global	5. 総ページ数 300
3. 書名 Indigenous Language Acquisition, Maintenance, and Loss and Current Language Policies	

1. 著者名 片岡邦好（編）	4. 発行年 2020年
2. 出版社 愛知大学人文社会学研究所	5. 総ページ数 85
3. 書名 ことばの詩 生活の詩 社会の詩 : 日常の中のポエティクス（愛知大学人文社会学研究所主催シンポジウム 報告書）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------